

## トピックス

## 清新鶴の会から新師範誕生

| 1

清新鶴の会(指導; 蒔澤徹師範)から久々に新師範が誕生しました。かねて同会で研鑽を積んでいた山田豊さんが、去る11月3日の本部道場での審査会において晴れて師範に昇格されましたので、ご紹介して、お祝い申し上げます。

## 瑞江鶴の会が地域祭りで表演

瑞江鶴の会(指導; 茶木登茂一)は例年通り、11月12日開催の第41回・東部地域祭に参加して、有志11名が、区民館前の特設舞台上で八段錦と二十四式太極拳の表演を行い、大勢の観客から拍手を頂きました。

## 浅草寺を歩く

中野完二先生ご夫妻はじめ太極拳のお仲間総勢16人で浅草寺を歩き、神谷バーで打ち上げをするという催しを10月29日の日曜日に行いました。当日はあいにく台風22号が関東南岸に接近するというので、散策先を当初予定した隅田公園から急遽浅草寺とその周辺に変更して、傘を差しての散策となりました。

浅草寺本堂【右】では、ふだん皆さんご覧になっておられない、内陣の裏に秘めやかに祀られている“裏観音菩薩立像”を拝観しました。また、境内のそこここにある、歴史的な、またユニークな、建造物や石像、石碑などをご紹介しました。

打ち上げの神谷バーでは、小生が用意した資料に基づいて『聖観音菩薩像を巡る謎のトライアングル～浅草寺・待乳山聖天宮・長昌寺の由緒に潜む謎を紐解く～』というお話しをさせていただいたあと、名物の下町洋食を肴に、奇酒“電気ブラン”を酌み交わしながら、大いに話が弾みました。



## 閑人閑話 龍・ドラゴン・ナーガ

龍は中国における想像上の動物ですが、古代から、聖獣、霊獣として特別な扱いを受けてきて、かつ皇帝の権威の象徴として用いられてきました。龍は水中にすみ、時に雷鳴や、竜巻とともに空を飛ぶともされています。



逆に言えば、雷や竜巻などの自然現象が、龍という想像上の動物に比定され、さまざまに造形化が進んだものとも言えそうです。【右上画像; 北京北海公園内の九龍壁の一部】

ドラゴン【左画像】は西欧の文化圏で共有されている伝承や神話における伝説上の生物ですが、新約聖書でも悪魔、サタンの化身として書かれているように、

また中世では魔女が操る怪物として描かれているように、もっぱら悪の象徴としての扱いを受けています。この画像のように、憎々しげな眼を持ち、大きな翼と長い尻尾を持つ形が中世以降では一般的です。恐竜などの化石から想像が膨らんで出来てきた造形かと言われています。

ですから、**龍**と**ドラゴン**は、まったく正反対の存在なのですが、言葉としては、龍を英訳すれば“Dragon”と、“Dragon”を訳せば龍になるのですから、たいへん面白いものですが、おそらくイメージ上の混乱が双方にあるのではないかと思います。

**龍**については、ドラゴンと違い、翼がないので、起源的にはワニ説もありますが、仏教伝来後、インド神話の**ナーガ**(大蛇)を、龍と翻訳したため、以降はナーガの影響も受けているという説もあります。



ナーガは、ヒンズー教の主神「ヴィシュヌ」の化身の一つとして、左図のように造形されています。ちなみに「蛇神」として言う場合には「ナーガラージャ」と表現されます。七つの首（コブラを思わせる）を持つ形が普通です。また大乘仏教の初期法典である法華経に仏陀の眷属のひとつとして登場していますので、のちに、仏教がインド土着の神々を取り込んでゆく過程で、右図のように、“釈迦の悟りの時に保護したナーガ”として造形されるようにもなります。その後中国に



においても、八大竜王という名前で知られるようになります。

このような多頭の蛇については、ギリシャ神話でもヘラクレスに退治された九頭の大蛇「ヒュドラー」がありますし、日本では須佐之男命に切り殺された「八岐のおろち」の話が日本書紀にもありますが、何かそれぞれに関係があるのでしょうか？

話を**龍**に戻しますが、中国の古代文明においては、龍は水神、つまり水を支配する神、瑞獣・聖獣という形で信仰され、また造形されていましたが、次第に、皇帝の権威の象徴として用いられるようになり、宮殿に「九龍壁」を建てたり、皇帝の衣服に龍を織り込んだりと、ますます権威付けが進みます。

さらには描かれる龍の足の指（爪）の数について、明の初代皇帝は元の規則を踏襲し、皇帝の象徴である竜は5つ、貴族や高級官吏用は4つ、下級官吏や一般大衆用は3つと定めたとされています。あるいは、忠実な朝貢国である朝鮮王朝は4つを許されたが、日本は3つしか許されなかったとか、あらぬほうにまで、権威主義が拡散していった歴史があります。

ところで、11月8日、訪中したトランプ大統領を、故宮（紫禁城）に案内した習近平主席が、“私たちは龍の後継者です”と発言したと報道されていました。まさに紫禁城の主、つまり皇帝として、トランプ大統領に対したようだとコメントも紙上に出ていました。しかし、果たしてトランプ大統領はこの龍＝ドラゴンという言葉をどう理解したのでしょうか？まさか、“サタンの化身”とでも理解したのではないでしょうね。大変興味があります。

## 左顧右盼 第20話 『チベットの神秘・チベットの悲劇 その3』

### 4・チベット仏教について【前号より続く】

三つ目の特徴は、密教がほぼ完璧に伝承されてきたことです。とくに密教のなかでも最も高度で、危険な「性瑜伽（ユガ＝ヨーガ）がひそかに伝承されてきたことでしょう。チベット寺院にあからさまに飾られている歡喜仏【次頁上】や、それが象徴する性瑜伽の秘儀の奇怪さなどは、



我々の理解を超えるものではありません。しかしまた、チベット仏教が、中国の、元、明、清と三王朝の長きにわたって、皇室の帰依を受け続けてきたその秘密は、「性瑜伽」が歴代の皇帝たちを虜にしたからに他ならないという説もあります。たしかに、歴代の皇帝が仮に儒教、道教を強く信奉する立場であれば、たちどころにチベット仏教は弾圧され、チベット国の存在も危うかったはずで



中国の版図内の諸民族、満州族、モンゴル族、チベット族、さらに西方の諸民族をふくめてチベット仏教の信仰が大衆に深く根付いていたという理由に加えて、皇室、皇帝にとってもチベット仏教がそのさまざまな呪法の効力(性瑜伽を含む)によってたいへん魅力的であったから、と解釈すると分かりやすいと思います。

ただし、新中国建国直後の中国共産党の立場、宗主国の立場(それが、有効であったかどうかは別として)から、チベット仏教は邪教であり、人民をたぶらかすものであるという主張を、チベット侵攻の大義名分にしたこともまた明快な史実でもあります。

### 5. チベットのシンボル「カイラス山」

カイラス山はアリア人がインドへ進出してくる前から、あるいはその過程で、強く認識されてきた聖山でした。ヒマラヤ山脈の北側のチベット西部の高原に忽然とそびえたつ標高6656mの高山です。すぐ南には、海拔4588mの聖湖「マナサロワール」と「ラカス・タル」が広がっています。一帯がまさに浄土を思わせる荘厳な風景なのです。



ここが世界の中心で、そのふもとにある二つの湖からインダス川とガンジス川が流れだすと信じられていました。【上；マナサロワールから望むカイラス山】

仏教徒にとっては釈迦牟尼仏の象徴として、また湖や四圍の山々とともに、天然の立体曼荼羅として、崇められているものです。

また。バラモン教においては、シヴァ神はこのカイラス山の守護神であるとされていました。ちなみに、のちに中国経由日本に伝わった毘沙門天は北方の守護神とされて、大和朝廷による蝦



【写真；左がカイラス山の南面で、右が北面です。】

夷征伐の際に大いに利用されましたが、じつはシヴァ神の部下というか化身の一つであったクベーラ(別名ヴァイシュラヴァーナ・毘沙門天)がその正体です。

カイラス山はそのユニークな姿から、金精様つまり男性のシンボル、に例えられていますし、同時のシヴァ神の象徴でもあります。ヒンズー教徒、チベット仏教徒、ボン教徒、ジャイナ教徒、

それぞれにとっての聖山がこのカイラス山で、そのふもとをぐるっと一周するのが、いわゆるカイラス巡礼です。定めに従ってカイラス山を右回り（ボン教徒だけはなぜか左回りだそうです。）に廻る、さらにはそれを何度も繰り返すことにより功德が高くなるということです。一廻り約52キロ<sup>1</sup>、途中には標高5630<sup>1</sup>の峠を越えますし、河口慧海の記録や、最近の旅行ガイドブックによると、徒歩だと約14時間（チベット人の場合）、五体投地だと2～3週間かかるそうです。それを少なくとも3回は廻るそうですし、河口慧海の本によると、これが外回りの一周路であって、内側のより高いところに内回りの一周路があって、外回りを21回済ませた者だけが挑戦できるとあります。カイラス山は正確な四角推の山で、その四面は正確に東西南北を向き、南面はサファイアからできているので青く、西面はルビーからできているので赤く、北面は金からできているので黄色く、東面は銀からできているので白いとされています。

## 6. 政治と宗教の本拠「ポタラ宮」

17世紀にダライラマ5世により建造された、チベットの政治と宗教の本拠である大建造物です。当初は白宮のみが建てられ、のちに紅宮が増築されて現在のような姿となりました。13階建て、基部からの総高117m、建築面積にして1万3000㎡という、巨大な建物です。部屋の総数は白宮、紅宮合わせて2000とも3000とも言われています。岩山の南面を利用して建てられています。最上階の標高は富士山と等しい3777<sup>1</sup>です。

白宮はダライ・ラマの居住と政治的な執務にあてられた領域です。紅宮はもっぱら宗教的な聖なる空間です。ダライラマ5世を初め歴代法王の霊塔や仏像、神像、あるいはおびただしい壁画などなどを飾る神秘的な空間や部屋が続いています。



【上；ポタラ宮全景・2001年7月撮影】

ポタラの名は観音菩薩の住むとされる「補陀落」のサンスクリット語「ポタラカ」に由来しています。また中は立体曼荼羅とも言われ、信者は下層階から右回りにらせん状に上がりながら参拝するような仕掛けとなっていました。（世界遺産となった現在では、裏山をバスで上がって裏から入場して、最上部から降りてゆくのが拝観・観光コースとなっています。）

## 旅をうたい拳を詠む

## 秋深みゆく

この秋の最後の枝豆茹でながら  
 思わず歌う“今日でお別れ”  
 目はスマホ耳ヘッドホンロマスク  
 内に籠もりし三猿が往く  
 四回も伴侶を替えし孫文と  
 蒋介石のそれぞれの訳  
 いわし雲西の空へとどこまでも  
 その果てるさき山頭火が往く  
 新宿の高層ビルに秋の陽は



身を削がれつつ落ちて行くなり  
 暮れなずむ空に黒富士浮かび来て振りさけ見れば十二夜の月

いざよい  
 十六夜の残りの月を仰ぎつつ太極拳舞うたおやかに舞う

【文京シビックセンター25階展望ラウンジより】